談論風発
INTERVIEW

坂元 龍三
SAKAMOTO Ryuzo
東洋紡会長
関経連副会長

素材力でイノベーション
―技術と市場を結ぶ―

「今後のものづくりのあり方とは」――これまで繰り返し問われてきたこの命題について、関経連副会長として産業振興委員会を担当するにあたり、皆さまと議論を深めたいと思っています。

新興国の成長著しい中で、サプライチェーンは大きく変化しています。弊社が身を置く繊維産業は、その変化の影響を早くから受けてきました。グローバル化し、また付加価値構造が変化していくサプライチェーンにおいて日本の繊維産業をどのように位置づけ、いかにその強みを発揮するのか。今日では、繊維産業のみならず、多くの産業に突きつけられている課題です。繊維産業では、業界の自助努力と国によるさまざまな支援策の結果、グローバル市場で優位に立つ革新的な繊維素材、すなわち機能性衣料や産業用としての高性能繊維が大きく成長し、超高強力繊維の世界シェアは5割を占めています。それまでの素材技術の蓄積と深耕、さらに加工技術との融合をはかったこと、それに加え、国内においてアプリケーション展開や市場規模が限定されたことから、早くからグローバルなサプライチェーンに組み込まれることを意識し、海外企業と一体で用途開発に取り組んできたことが成功の要因です。これは、まさに日本の得意とする素材技術でイノベーションを起こし、それを事業化し製品市場につないだ代表例です。

このような経験をふまえ、私は日本の素材・部材産業には次世代の成長を促す高いポテンシャルがあるものと考えており、政府の「日本再興戦略」に示されている環境、健康、医療分野の高付加価値化にも大いに貢献できるものと期待しています。

日本の素材・部材産業の「ものづくり」としての強みは何か。その一つは、市場ニーズから生まれる「もの」の概念を的確にとらえることを基本とする品質保証（QA）体制を、時代の変化に柔軟に対応させてきたことでしょう。昨今、「もの」と「つくり」は分けて考えるべきだという声をよく聞きますが、日本の製造業にとって、それはずいぶん前から自明のことであり、企業の品質保証の仕組みに示されています。よくいわれる「ガラパゴス化」というのは、市場の求める「もの」と「つくり」の関係がうまく連動していないケースといえますが、ニーズに技術をすり合わせする力を十分に持っている日本メーカーの今後については、私はあまり心配していません。ただし、多様な市場に対応するという経験が十分ではないことから、今後は新市場で求められる「もの」の概念をもう一度しっかりとらえ直し、「つくり」のあり方を深く追求することが重要であると考えています。

そこで決め手となるのは「情報収集力」。海外市場に舞台が移り、情報が入りにくくなっている現実はありますが、直接市場に入って地道に収集するという基本を怠ってはいけません。その過程で製品化構想をもつ海外の「ビジョナリーカスタマー」を見つけ、彼らと連携しながら製品開発を繰り返し、それを新たなバリューチェーンやサプライチェーンとして育てていくことが求められます。

これから日本の素材・部材産業がグローバル市場でさらに強い地位を築くには、市場のパラダイムシフトを感度よくとらえ、「もの」と「つくり」の関係を常に時代に適応させ、進化させることが肝要です。関西は立地がよい上、集積する中堅・中小企業の素材・部材技術のポテンシャルも高く、これらを生かさない手はありません。どこに強みがあるのか、特に技術蓄積の高い分野を今一度把握し、その強みをどのように引き出していくのか、皆で真剣に考える時期に来ています。（談）